奎章閣および三田渡碑瞥見記

加藤 直人

「第4回ソウル国際アルタイ学会――アルタイ学および言語学――」が2000年10月23日より同月25日まで，ソウル市南郊にあるソウル大学校人文大学で開催された。宿舎はソウル大学校のはずれにある同大の施設「湖巖教師会館Ho-Am Faculty House」であった。その会議の概要，とくに言語学関係の報告については，本号に山越康裕氏の紹介があるのでそれにゆずり，小稿では，筆者がソウル滞在中に訪れた機関で得られた情報を，調査日誌に基づき，報告しようとするものである。

10月24日（火）12時30分より，昼食後，雨中を歩いてキャンパス内にある奎章閣Gyujanggakへ行く。奎章閣の蔵書は，周知のとおり，日韓併合後は朝鮮総督府そして京城帝国大学図書館に移管され，現在にいたっている。朝鮮伝統の建築を模したビルディングの2階が展示スペースとなっており，所蔵する文書，書籍，地図等のレプリカが所狭しと並べられており，朝鮮王朝の歴史が文書，地図等からたどれるように配慮されている。ちょうど中高生の団体が見学に訪れており，1861年に作製された「大東輿地図」（全22副），また同じく19世紀に作製された「東輿図」（全23副）の巨大な全面展示の前で，現在の地名と比較していた姿が印象的であった。

10月25日（水）9時より，会議のエクスカーションの一環として，キャンパス内にあるソウル大学校中央図書館に行き内部を見学する。6階の古籍部の書庫に入り，その蔵書を調査した。この古籍部は，主として京城帝国大学時代に集めた蔵書が中心である。なかには，「満漢祭祀文」（折本），「鳥居龍蔵撮影満洲史蹟（高句麗）写真帖」など興味深い文献も見られた。次いでおなじくキャンパス内にあるソウル大学校博物館に行く。考古資料，シャマニズム関係資料の展示が興味深い。

博物館からマイクロバスに乗り，13時過ぎに1988年ソウル・オリンピックのスタジアムの近く，ロッテ・ワールドの南にある「三田渡碑」を見学する。鴛淵一，成百仁SEONG Baegin氏らの解読・研究(1)で著名なこの碑は，周知のとおり，崇徳四年(1639)年に撰文された「daicing gurun i enduringge han i güng erdemui bei 大清国聖皇帝功徳碑」である。この碑はいままで筆者が東北各地で確認してきたどの石碑より立派なもので，中国より運ばれた石材でつくられたらしい。また中国風の亀趺の上に立てられた碑の正面には，左に満文，右に蒙文，そして背面に漢文で碑文が刻されている。現在でも肉眼で碑文がある程度解読できるのは，のちに補刻されたのかもしれな

(1) 鴛淵一「清初に於ける清鮮関係と三田渡の碑文」(『史林』第13巻，第1～4号，1928年)，成百仁「三田渡碑 満洲文」(『東亜文化』(ソウル大学校東亜文化研究所) 第9号，1970年)。

い。

本碑は，以前漢江の畔に立てられていたが，1959年にこの場所（ソウル特別市城東区松坡洞）に移された。成氏が調査した約40年前は，このあたりは一面の田圃で，拓本をとるための足場にのぼると漢江が望まれたという。現在は，住宅密集地の中にあり，近隣の児童の格好の遊び場となっている。近年，中国第一歴史檔案館所蔵内国史院「天聰四年檔」が公開され，その天聰四年十二月二十八日の条にその原文が示されていることがわかり[2]，碑文解読問題に一応の決着をみたようであるが，清初史，朝鮮史ばかりでなく満洲語の言語学的な展開の上でもきわめて貴重な資料であることは論を俟たない。

次いで，景福宮，中央博物館に行く。中央博物館ではちょうどハングルに関する特別展を開いており，普段は公開しない『訓民正音』初版（国宝）を見ることができたのは幸いであった。巡検は南大門市場で終了し，日本側会議参加者の一部は菅野裕臣氏の案内で，南山にある李朝時代の城壁趾を見た。

10月26日（木）9時，ソウル大学校東洋史学科の図書室へ行く。「東洋史」という分野は日本と韓国のみで存在するものあり，きわめて興味深い学科名である。さて，同図書室の蔵書はさほど多くはないが，元一橋大学の中村政則，元都立大学（駿河台大学）の野澤豊両氏の寄贈本がきちんと整理されて架蔵されていたのが興味深かった。それぞれ「中村文庫」，「野澤文庫」と名付けられている。

10時に奎章閣へ行く。おととい24日は展示室だけの見学であったが，今回は，成百仁氏らのご尽力による館長の特別の計らいで書庫を見ることができた。書庫は，ビルディング1階にあり，常に室温22度，湿度55％に保たれている。奎章閣は，李朝第22代正祖（位1776～1800）の時代，1776年に王室図書館として出発し，現在，書籍18万冊，古文書5万件，版木1万8千枚，マイクロフィルム1万2千リール，計26万点の資料が保管されている。このうち，元来奎章閣に保管されていた資料は14万件で，その他は京城帝国大学時代の収集と個人の寄付（方鍾鉉氏，李秉岐氏等）によるものである。

現在奎章閣には，1910年までの資料が所蔵されており，1911年以降の資料はソウル大学校中央図書館に収められている。奎章閣に所蔵される古文書のうち官員の任命書などを中心とする「官符」が約30％，土地契約文書などの「私文記」が約70％で，これらは一部元来奎章閣にあったものも含まれるが，多くは朝鮮総督府および京城帝国大学が収集したものである。古文書のうち戸籍は304冊収蔵され，1600年初頭のものから基本的に，1900年代初頭までのものである。20世紀に入ってからの戸籍（案）として着目される一つに，間島地方のものがみられる。「光武六年戸籍案」と題するこの貴重な資料は，1992年にソウル法経出版社より，『一九〇二年辺界戸籍案』（梁泰鎮編，国境・領土研究シリーズ）として影印出版されている。

---

(2) 中国第一歴史檔案館編『清初内国史院満文檔案訳編（上）天聰朝，崇徳朝』（北京・光明日報出版社，1989年10月）448～450頁。

奎章閣に所蔵される古文書のなかで特筆すべきもののひとつとして，国家的な行事の次第を彩色の図で示した「儀軌」がある。この「儀軌」は全5部つくられ，そのうち1部は御覧本として紅匡格の用紙に精鈔され，絹の表紙に5つ穴で綴じられ，他のものは麻が用いられて4つ穴にて綴じられた。書庫では『明成皇后國葬都監儀軌』等を見せていただいたが，頑丈な金属の留め具によって綴じられた巨冊に描かれた彩色図にはすばらしいものがあった。現在奎章閣には，この類の「儀軌」が，約3千冊所蔵されているという。

他に，中国の「玉牒」にあたる「璿源譜類」，1777年以降奎章閣で担当官によって記された「内閣日暦」なども注目すべきものであろう。また，同閣所蔵の満文資料としては朝鮮四譯院譯學處編の「同文類解」等があることは周知のとおりである。そのほかに，若干の外交関係文書も所蔵されている。なお，「朝鮮王朝実録」と「承政院日記」については，「国宝書庫」に別置されている。これらは「国宝」であり，一般に公開はなされていないが，周知のとおり，古文書を含めてこれらの資料は影印のうえ出版されている。

エレベータをはさんだ古文書庫と反対側の書庫に，主として李朝正祖時代より収集された約7万冊の漢籍が排架されている。漢籍そのものは18世紀後半からの収集であり，珍しいものはそれほど多くないが，とくに眼をひくものとして，1777年に購入されたという「古今図書集成」5,022冊があげられる。これには正祖が自ら捺したという印が付されており，その捺した総数からみて，正祖の本書に対する愛着がしのばれる。なお，李朝王家の蔵書については，隆熙三年(1910)に宮内府奎章閣図書課で編纂された『帝室図書目録』（ソウル・景仁文化社，1986年5月，リプリント版発行）に詳しい。

10月27日（金），この日は学会および調査とは別に，勤務する日本大学文理学部がソウルの高麗大学校文科大学と学術交流協定を締結することになり，その交渉と調印式に参加した。その際，高麗大学校博物館を見学する機会に恵まれた。同館は，国宝3点を有する韓国有数の博物館であるが，その所蔵品のなかに崇禎十二年の銘記のある紅夷炮1本，『清語老乞大』の版木300枚が含まれている。とくに後者は，同書の成立をめぐる問題に関わるきわめて重要な資料として注目されている。これについては周知のとおり，高麗大学校教授鄭光氏らの研究がある。また，鄭光氏は最近日本の駒澤大学図書館所蔵『清語老乞大』（金澤庄三郎寄贈本）を影印の上，詳細な解説をつけて『清語老乞大新釋』（ソウル・太學社，1998年12月）を上梓されていることも付け加えておく[3]。

最後に，学会についてもすこしふれておきたい。本会議の討議内容は，歴史，言語，民族等々

(3) これ以外の情報として，以前より再版が待たれていた『漢清文鑑』（全7冊）1998年，ソウル・弘文閣）が出版されたことを付け加えておく。その各冊の内容は，第一冊（巻一～巻三），第二冊（巻四～巻六），第三冊（巻七～巻九），第四冊（巻十～巻十二），第五冊（巻十三～巻十五），第六冊（韓国語索引），第七冊（漢語・清語索引）である。

多岐にわたっており，また使用言語も漢語，日本語，韓国語，英語と千差万別であった。しかし，発表者は概ね英語または漢語，ときに日本語を用いて討論できる能力を有していたので，予想以上の議論が展開され，有意義であった。ただ，古代チュルク語研究からモンゴルの民族学的研究まで，その内容があまりにも広範であったがゆえに，その専門の違いから議論がかみあわない部分もみられた。

今回の会議は，成百仁名誉教授を中心として，ソウル大学校言語学科の金周源KIM Juwon氏，全北大学校の高東昊KO Dongho氏をはじめとする韓国アルタイ学会の方々の努力で，きわめて効率的に運営され，あらゆる面に配慮が行き届いていた。会議当日には，すべての発表者のフルペーパーがProceedingsとして編まれて準備されており，会議参加者はそれを確認しながら，発表を聞き，討議を行なった。国際会議を開催するということは，会議の内容ばかりでなく，会議参加者の査証や宿舎，そして食事の問題にいたるまで実に多岐にわたる。それらの問題をすべてクリアして，本会議を成功に導いた成百仁氏をはじめとする関係諸氏に心より感謝する次第である。

（日本大学文理学部）